

学校は 社会の入口？

札幌アーティストインスクール事業
おとどけアート 2016 記録集



札幌市立鴻城小学校 × 山崎阿弥

はじめに

おとどけアートは 2008 年度から「第二次札幌新まちづくり計画」（2011 年度からは「第三次札幌新まちづくり計画」）の一部としておとどけアート実行委員会の運営によりスタートし、今年度で 9 年目となりました。

私たちは、アートがあらゆる媒体を通して、多様な価値観や生き方を人や社会に提供すること、またアーティストの活動や作品が時に人と人、人と環境を結び付ける可能性を秘めていることに注目し、様々な教育現場で活動を展開してきました。私たちの活動がきっかけとなって、学校が、子どもや教職員、保護者、地域の方々が交流する集いの場として機能すること、その中で、子ども達を取り巻く環境に関わる人々が共に考え、地域、学校、個人単位での独自の取り組みが生まれてくることを願っています。

2016 年度のおとどけアートは、初めて実施校を公募によって決定しました。「おとどけアートに何を期待するか。」「学校の特色（環境・施設・歴史・地域文化・行事・特徴的な取組など）は何か。」などについて、担当の先生と事務局が時間をかけて話し合い、派遣するアーティストの選定をしました。学校からは「アーティストの活動を通して、子どもたちが普段経験することが少ないアートの楽しさを味わわせたい。」「教科指導の中で子どもの発想・着想を活かした活動の展開を模索している。アートに触れることで新たな気付きや感動が生まれ、子どもの心の安定や豊かさに繋がることを期待したい。」「子どもたちは自然の中での学習を楽しみにしている。地域環境を活かした創造・表現の機会を増やし、美しいものを求める心を育てたい。」「おとどけアートのねらいが本校の目指す教育活動と合致し、保護者や地域の方々への発信となる。多くの方に見ていただきたい。」等々語られ、子どもに対する教職員の温かな眼差しと、地域ぐるみでの学校づくりの意欲がうかがえました。

それにより今年度は小学校 5 校で開催され、参加人数は総計 2,410 名となりました。5 つの小学校がおかれている地域環境・歴史、そして学校目標や特色ある活動などはそれぞれ異なり、またそこに在籍している児童の実態やその保護者・地域の皆さんの期待も様々です。派遣されたアーティストは、限られた開催期間の中で学校や地域がもつ環境を理解し、そこでの可能性を追求することに努めました。この間、児童・教職員の皆様はもとより、保護者や地域の団体の皆様と関わる機会も得られ、地域における学校の役割について話し合うことができたことは大きな成果となり、この度その活動の様子を報告書としてまとめました。

2016 年度の活動報告書の発行にあたり、ご協力いただいた学校の教職員、アーティスト、そして本事業の運営に携わる関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、これからも私たちの取り組みが、子どもたちを取り巻く環境のあるべき姿について、皆様と共に考える機会となりますことを心より願っております。

おとどけアート実行委員会 実行委員長 池田 悦子

札幌市立鴻城小学校 × 山崎阿弥



□活動内容：

アーティストの山崎阿弥さんが音にまつわる表現活動をはじめ、聴覚以外の五感を使って感じ取ることをテーマとした様々なアートワークを展開しました。交流活動は中休み、昼休み、給食時間だけでなく、登校時間（朝の校内放送）や、授業内でも行いました。また、窓ガラス、使用されていないトイレ、校舎の中庭など、様々な場所に山崎さんの作品が現れました。

□開催場所 札幌市立鴻城小学校

□開催期間 2016年10月3日（月）～10月22日（土）

□参加人数 児童414名、教職員28名、保護者・地域住民約100名 計542名

□活動場所 札幌市立鴻城小学校内 多目的ホール・中庭など



Photo by ナシモト タオ

山崎阿弥 (Yamasaki Ami/ 声のアーティスト、映像、造形作家)

声で空間の陰影を感得しインスタレーションやパフォーマンスによってその濃淡を引き出したり／失わせたりすることを試みる。創作の根本に「世界はどのようにして出来ているのか?」「世界の・わたしの材料は何か?」という問いを持ち、表現活動と作品（制作）をその問いへの答えではなく“アクション”と位置づける。

HP <http://amingerz.wix.com/ami-yamasaki>

札幌市立月寒東小学校 × 長谷川仁



□活動内容：

開校 50 周年を迎え、新校舎が完成した月寒東小学校。アーティストの長谷川仁さんは、新しい校舎に子ども達の「大笑い」の声を響かせるため「大きな子ども」の操り人形を約 2 週間かけて制作し、校舎中庭に設置しました。活動最終日には完成お披露目会を行い、子ども達と共に人形を操り、たくさんの笑顔と共に大きな笑い声が学校中に響き渡りました。

□開催場所 札幌市立月寒東小学校

□開催期間 2016 年 11 月 22 日（火）～ 12 月 2 日（金）

□参加人数 児童数 537 名、教職員 36 名、保護者・地域住民約 50 名 計 623 名

□活動場所 札幌市立月寒東小学校内 児童会室・中庭など



長谷川 仁 (Hasegawa Jin/ 美術家)

1972 年北海道生まれ、東京在住。社会学、プロダクトデザインを学んだ後アーティストとして活動を始める。社会とのつながり、自然とのつながりを皆で分かち合いたいとの想いで様々なプロジェクトを行う。

HP <http://hasejin.com/>

札幌市立西岡小学校 × 深澤孝史



□活動内容：

アーティストの深澤孝史さんがお金のかわりに自分の「とくいなこと」を預け他人の「とくい」を引き出すことのできる「とくいの銀行札幌西岡小学校支店」を設立、校内に受付窓口、ATM が設置されました。預けた「とくい」は通帳に記入され、引き出された「とくい」は活動部屋内にブースを持つことで実現され、様々な「とくい」が同居する空間が生み出されました。

□開催場所 札幌市立西岡小学校

□開催期間 2016年12月6日(火)～12月16日(金)

□参加人数 児童432名、教職員28名、保護者・地域住民約20名 計480名

□活動場所 札幌市立西岡小学校内 児童会室、廊下など



深澤孝史 (Fukasawa Takafumi/ 美術家)

美術家。1984年山梨県生まれ。2011年より取手アートプロジェクトにて、お金のかわりに自身のとくいなことを運用する《とくいの銀行》を開始。2014年には「めぐりアート静岡」にて土で現像する写真スタジオ《photoground》、「札幌国際芸術祭2014」にて札幌の開拓史と現代人の特性を結びつけて新たな歴史を再創造していく《とくいの銀行札幌》を実施。

HP <http://fukasawatakafumi.net/>

札幌市立苗穂小学校 × 進藤冬華



□活動内容：

大正9年に開校し約100年の歴史を持つ苗穂小学校。そのグラウンド内にひっそりと建つ苗穂小学校記念館(旧校舎)に眠る様々な郷土資料を掘り起こし、子ども達や先生、地域の方々と一緒に鑑賞しました。そして、その際に出てきた思い出やうわさ話などを手掛かりに「なえぼのむかしをさいげんしてみる」と題しスライドフィルムを使って撮影し、撮影のために制作したアイテムと合わせて作品展示を行いました。また、最終日にはスライドの鑑賞会を行いました。

□開催場所 札幌市立苗穂小学校

□開催期間 2016年1月23日(月)～2月17日(金)

□参加人数 児童数329名、教職員25名、保護者・地域住民約30名 計384名

□活動場所 札幌市立苗穂小学校内 外国語教室・廊下など



Photo by 小牧 寿里

進藤冬華 (Shindo Fuyuka/ 美術家)

札幌出身。江別在住。北海道の歴史や文化に関わる作品を中心に制作。文献や聞き取り、博物館での調査などを経て制作を行う。作品には手芸、写真、文章など様々な要素を用い、これらを構成した展示を行う。札幌国際芸術祭2014や2015年北海道北方民族博物館での個展、横浜の「黄金町バザール2015」への参加をはじめ、フィリピンやドイツなどでも滞在制作を行っている。

アーティスト・イン・スクールとは何か？

<はじめに>

おそらく、この記録集に目を通す人の多くは「おとどけアート」もしくは「アーティスト・イン・スクール(以降AIS)」という活動を初めて知る方、もしくは聞いたことがある方々で、大抵が当事業を受け入れる小学校関係者とアーティストを含むアート界限の人達だと推測する。記録集の端から端まで目を通すと、この活動についてなんとなく全体像が見えてくるような気もするが、実際には何を目的にしているのか、具体的なゴールは何なのか分かりにくいのではないかと思う。今回、2016年度のまとめとして、著者が担当した4校の実践を振り返りながら「AISとは何なのか」について記そうと思う。この文章が小学校にとって当事業を受け入れるための一助となり、小学校に派遣されるアーティストにとっての手がかりとなれば幸いである。

<活動目的>

AIS事業で掲げている二つの目標は以下の通り。

A - アーティストの創作活動の場を生み出し共有する場と機会を創出する

B - 小学校に地域コミュニティの核となる可能性を模索し拡張する

Aは学校に関わる人達(子どもに限らず教職員や保護者、活動に関わるすべての人)がアーティストに出会い、創作活動を通じて得られる経験・体験を指す。何かを描いてみたり、みんなで曲を作ったり、アーティストと一緒に考えたりする所謂参加型と言われるようなもので、アートについて専門的な知識がない方でも、なんとなくイメージできるのではないだろうか。

そしてBは、そういった創作活動(A)をきっかけに、様々な人達が関わり合う場を生み出し、小学校の中に地域の拠り所という機能を生み出そうという試みなのである。

<活動の骨組み>

では、その二つの目的を果たすためにどの様なやり方をしているのか、特徴的ないくつかの骨組みを見てもらいたい。

「アーティストは転校生」「学校をアーティストのアトリエに」「休み時間の交流」

アーティストは転校生として小学校にやって来る。学校に一定期間通いながら校内のどこかで何かをしている。面白い事をやっていることもあれば、何をしているのかよくわからないこともある。子ども達は、休み時間に活動に参加することができる。時に大人が参加することもある。人の関わり合いによって活動内容が変化してゆくので、最初の計画と最後の姿がまるで違ったものになることもある。クラスに給食を食べに来て世間話をするのもあれば、授業を見学しに来たり、時には先生のように授業をやってくれることもある。アーティストがやって来るのは確実だが、どんな人が来てどこで何をやるのか、それは始まってみないとわからないのがこのAISなのである。



<各小学校での活動について>

次に、2016年度AISに参加したアーティストが先述のような骨組みと小学校という環境の中でどんな動きをしていたのか、各小学校ごとに振り返ってみたい。(活動内容詳細については記録集掲載情報やAISの活動報告ブログ「inschool.exblog.jp」をご参考下さい)

鴻城小学校/山崎阿弥

期間中様々な活動(糸電話、風船、紙飛行機、目隠しor耳栓ウォーキング、語感を形にする、描いて消して描く etc.)を行い、朝の放送から、休み時間の交流、授業への参画、職員室での交流、活動新聞配布(毎日)、作品設置を3週間という時間の中で行った。積極的に人に関わり、アイデアを投げかけてゆくという姿勢が一貫しており、アーティストが活動に費やした熱量分の反応が子ども達や教職員から見られた。

月寒東小学校/長谷川仁

ひとつの大きな目標(巨大人形の制作)を設定し、実現に向けて試行錯誤を繰り返し、ゴールに近づいてゆく活動だった。アーティストが旗を振り、今までやったことのない一見無謀にも思える様なことに挑戦することで、まわりの人たちも次第に活動に巻き込まれていった。「できるのかわからない」という不安と、「できたらどうなるんだろう」という期待が交錯することで、ドキドキ・ワクワクを共有する制作現場となった。

西岡小学校/深澤孝史

「とくい」を預けた人とそれを引き出した人のために、それ以外の人たちが協力し実現してみるという活動。アーティストが大枠(活動の場)を用意し、子ども達がアイデアの企画・制作・運営といった役割を担う構造になっていた。また「とくい」というキーワードをもとに場における主役(企画者/実施者)が日々生まれ、子どもたちは時に主役を担い、時に他の主役となる子どもをサポートするという状況が生まれていた。

苗穂小学校/進藤冬華

地域の歴史を過去の資料やそこに住む(知る)人々の思い出という切り口によって再認識する活動。アートを媒介に過去の事柄を追体験することで、そこに関与する歴史や場所が子ども達にとって身近なものになっていた。また、工作(段ボールによる思い出の再現)やスライド機器の使用(撮影、スライド制作、上映)といった活動に付随する様々な要素がとっかかりとなり、趣味趣向の異なる子ども達が参加していた。



<学校の求めること>

通常、学校で外部人材を教育活動に活用する場合に求めること、期待することに、以下のことが挙げられる。

- ①専門性を持った人材の方がより教育効果が期待できる。
- ②教員の手をあまり必要とせず、且つ費用の負担が少ないこと。
- ③比較的短時間で(短時間で)教育的効果が見えるもの。
- ④全校児童が関わるのであれば、どの発達段階にあっても興味や関心を持つことができる内容であること。
- ⑤児童や地域の実態から経験させたいこと。特に研究会や周年行事は学校としては大きなイベントだから、見える形で実施したい。

現在、様々な小学校において外部人材を活用する試みがなされている。そのひとつとして各分野におけるプロが小学校に訪れ、子ども達に普段できない体験をしてもらおうという活動がある。AIS事業もアーティストの創作活動によって小学校に非日常を作り出し、生のアートに触れてもらう機会を生み出すことが多い。また、事業実施における費用負担は基本的には発生しない。

しかしながら、通常の学校教育で求められる教育目標とは一線を画すAISの活動は、活動のゴールを設定することなく実施されることも多い為、内容がいまいち理解できない、一部の子どもや教職員しか関心がもたれないということも少なくない。必ずしも誰もが驚くような作品や表現が生まれるとは限らない。また、私たちが紹介するアーティストの中には、学校が苦手な規則や制度そのものに懐疑的であったり、直接的なコミュニケーションが不得意な人もいる。つまり、学校が期待するような子ども達にとって手本となる理想の大人像の提示であったり、誰もが楽しめる解りやすい活動内容になる保証はどこにも無い。

では、どのようにAIS事業を理解すればいいのか。それには通常の外部人材の事業としてではなく、別の文脈から読み解く必要がある。それは、開かれた小学校としての外部人材との関わり方である。具体的に言えば、近年多くの小学校で見られる開放図書館、ミニ児童館、そして保護者や地域住民による読み聞かせの会、PTA活動、おやじの会、スクールガードといった学校を拠点とした自治意識に基づく活動を指す。学校の教育目標や評価基準の対象となるのではなく、あくまで学校という機能の一部として独立しながらも補助的な役割を担う、そんな関わり方である。AISが目指すのは、外部の人材でありながら小学校の日常に寄り添い、子ども達に何かをもたらしたり、逆に子どもたちから何かをもらったり、学校に足りない何かを補完したり、足りない何かを発見したりする、そんなあり方である。



<アーティスト・イン・スクールとは何か>

アーティストと呼ばれる人たちは日々の活動をギャラリーや劇場、ライブハウスといった文化芸術の場で発表している。そこはある特定の趣味や趣向が似た人たちが集まるひとつの社会である。そしてAISの舞台となる小学校もまた、多種多様な子ども達が集まるひとつの社会である。アーティストが小学校にやって来て創作活動を行うということは、つまりは異なるルールや価値観、考え方を持つ社会が混ざり合う場を作ることだ。そして、その場をきっかけに人と人が出会い、新たな人間関係が生まれてゆく。

AISに参加するアーティストはいち転校生として、小学校という社会に、子ども達や先生、時に保護者や地域の方々の中に飛び込んでゆく。(実はアーティストも自分が信じる表現を通じて、何ができるのか、何が起きるのかと、不安と期待を抱いて小学校にやって来る)そして、制作活動を通じて人に出会い、時に傷つき、時に元気づけられながら、アーティストもたくさんの経験をする。これは、子どものためだけの活動ではなく、関わる人それぞれが何かを得て、何かを与える、そんな活動なのだ。

だからコーディネーターは小学校にアーティストを招き、創作活動に多くの人たちが関わってきてほしいと思っている。このAIS事業を通じて、我々も多くのアーティストや子ども達、教職員、保護者、地域の人たちといった様々な人たちに出会うことができた。人との出会いは億劫で面倒なこともあるけれど、人生に喜怒哀楽をもたらし、その経験が人間を育ててゆくのだと思う。(著者もまたAISによって多くを学び、成長させて頂いたひとりである。)

当事業を受け入れてくれたある小学校の先生が活動終了後にこんな言葉をつぶやいた。「もっと最初から参加してればよかった・・・」そうなのだ!この活動に少しでも興味や関心があれば、好奇心に身を任せすぐにでも参加すべきなのだ。きっとアーティストの持つ魅力にやられ、気付いたら夢中になって、時を忘れて活動にのめり込んでいるはずだ。そして、そこで得たものが、今すぐに役に立つかどうかは分からないけれど、でもきっと人生のどこかでピカリと輝くんじゃないだろうか。(その反対もありえるけれど!)

このアーティスト・イン・スクールが、あなたにとってそんな「きっかけ」になればと願っている。

コーディネーター 小林亮太郎



とくいの銀行 西岡小学校支店を終えて(頭取日誌抜粋)

活動9日目、12月16日金曜日。

ダンスパーティー当日、そしてもう一つのひきだしイベント「ごはんをおいしそうに食べる」がおこなわれる日だ。朝から「DJのとくい」を引き出されたDJ TAMAさんが来てくれて打ち合わせをしつつ準備をする。中休みになりダンスパーティーがはじまる。入り口で仮面を配る。どの仮面がいいか悩む子どもが続出。5分ほどたってようやく開始。思った以上に人が集まる。これまで状況的にわりと秘密基地的な活動だったが、このイベントでようやくたくさん先生の先生にも参加してもらえる。司会のあらたくんが、1時間目の後の五分休みで司会の台本を見せに来てくれる。時候の挨拶なども入っており立派だ。

パーティーがはじまる。あらたくんに挨拶をしてもらおうとしたら、あまりの人の多い状況に混乱して泣いてしまう。代わりに友達がはじめての挨拶をよんでくれる。

DJ TAMAさんが音楽をかけはじめるが、DJダンスパーティー初体験の小学生しかいない状況なので、みんなどうやってのっていいかわからず呆然とする。TAMAさんがマイクをもって自己紹介がてら、みんなにいろいろ投げかけもしてくれる。一緒にジャンプしたり、声だしをうながしたりする。どうやってアガっていくかの基礎講座のようだった。その後2016年流行ソングのPPAPが流れ、だんだん緊張がほぐれていく。そうしたタイミングで、しまじろうのハッピージャムジャム、にんじやりばんばんとたてつづけに多くの子どもたちが踊れる曲をつなげる。発表会でみんなで踊ったらしく、担任の先生も一緒に踊る。はっこの方で、迷路係のゆかりさんが後ろの方で首倒立をはじめ。最後に、TAMAさんの超絶テクニックのスクラッチ演奏で締める。と思いきや、5分間あと時間があったのでもう5分ジャンプしながらDJにのって楽しむ。ちなみにせっかく作った仮面だが踊りにくいため結局ほとんどの子どもが外していたのであまり意味がなかった。

DJ TAMAさんは昼休みもミニDJ体験をひらいてくださるということで、とくいの銀行迷路に戻る。首倒立のだいじろうくんがまた授業を抜け出してやってくる。図工の先生がやってきて版画を提出しないと冬休みが来ないぞといわれるが、版画板がそもそも家にあるのでできないという。だいじろうくんはまったく今日は版画をやる気がないようだ。TAMAさんがだいじろうくんのためにミニDJレクチャーをしてくれる。そうするとだいじろうくんはスクラッチにどっぷりはまりだす。TAMAさんも、無茶苦茶だけどリズムがある、どんどんうまくなっていくと感心する。

給食の時間になる。3年1組に僕、小林さん、ひきだされた鈴木さん、TAMAさんのみんなでいく。3年1組は一度給食を食べたところだが、「ごはんをおいしそうに食べる」をひきだしたみかさんがこのクラスだったのでみんなでもういちどお邪魔する。鈴木さんは、みかさんの向かいにすわり一緒にごはんを食べる。この日はスープ麺だった。おいしそうにごはんを一緒に食べていた。昼休みにはDJ TAMAさんの体験コーナーを開いてもらう。

最終日なので、いままで迷路を作ってきたはいいが、ちゃんと迷路をまだ回っていないことに気づき、迷路体験ツアーを開催する。入り口はまず家具デザインのコーナー。ひろこさんはデザインだけして完成させなかったもので、小林さんが途中まで作ったものをみんなで見学する。次は首倒立コーナー。みんなで首倒立を行う。足のピンとのびたラインはやはりだいじろうくんにはみんなかなわない。次は水泳のコーナー。この二日、みかさんがサーキュレーターにからまったすずらんテープをいつもはさみで外からグサグサ刺してとろうとして結局とれず貴重な中休みが終わるという日々で過ぎていった難儀な場所だ。この日ようやく水泳ブース体験をようやく行われることになってよかった。

みかさん本人もなんとかクロールを行う。

次のコースは門をくぐってファッションショーのランウェイだ。しかしあいかわらず、半分はDJに使われているので半分だけウォーキングをして降りる。

その後、ダンス、テニス、絵を描く、リコーダー、デュエマ、野球、バスケのコーナーを体験してゴールへと向かうはずなのだが、ここでチャイムがなって終了。結局ゴールできないままとくいの銀行迷路は終了となる。

今回の活動は僕自身がなにかをなすための活動ではなく、学校というルール、とくいの銀行のルール、中休み、昼休みという時間の制約のなかで、それぞれの子どもたちが交差しながらどれだけ自分の活動を同時多発的に具現化していき、そこからどういった場をつくることができるかの実験だった。

僕のモチベーションとしてはなんだったんだろう。学校を開くということはどういうことなんだろうと。

今回の活動は、学校という場所で、もうひとつの評価軸をもった場が同時に立ち上げていくということだ。校長先生が2日目に話していたが、不登校の子がいたら教室にいつか戻ってほしいといていたが、それは学校の外せない目標でもあるのかもしれないが、それは学校の限界のひとつとも同時に感じた。完璧なシステムをひとつ作るのではなく、システムからあぶれても、いくつかの評価軸を選択できる社会をつくる方が健全ではあるのだろうと。しかしそんな社会はそんなに簡単にはつukれない。その上でおとどけアートの役割はなんだろうと考える。それはもしかしたら、学校を完成された場所でなくすことなのかもしれないと感じた。形式に当てはめることで、個々の不完全さを補う社会作りではなく、不完全で不安定な個を認めた上で、責任を個々に委ねる不完全な社会作りを目指しているのではないだろうかと感じた。それは言い換えると「可愛い社会」といえるかもしれない。

深澤 孝史



札幌市立藻岩小学校 × 藤木正則



□活動内容

藻岩小学校での藤木正則さんによる活動は、今年度で3年目となりました。今年度は、10月に台湾の小学校へ視察に行ったことにより、学校を含む子ども達を取り巻く環境についてより深く考えるきっかけを得ました。

そのことを前提の一つとして、藤木さんが感じた学校に対する疑問や2年間のアプローチについて教職員や幾人かの子ども達に対話を試みました。また、この3年間の活動で益々厚くなった壁を意識化するものとして、社会構造と教育現場の関係を省みるためのシンボリックな造作を教室に施しました。

□開催場所 札幌市立藻岩小学校

□開催期間 2016年4月27日(水)～3月24日(金)

□参加人数 児童325名、教職員24名 保護者・地域住民約70名 合計419名

□活動場所 札幌市立藻岩小学校内 教室、職員室など



藤木正則 (Fujiki Masanori/ 行為情報体)

藤木正則は1970年代後半から90年代半ばにかけて主に街中で行為性の強い作品を展開しており、個としての私と制度としての私、この両者の間にある不可解な境界に対する意識化という考え方を行為によって確認しようとしてきた。これらは自らの身体と身近なメディアを通して、時として周囲と良い意味での共犯関係を結ぶようなアプローチとして行われている。90年代後半からは、より日常の些細な事柄に目を向け、ここ数年はフィールドワークそのものの情報化や現場へのフィードバックを試みている。

あ あなた 学校に開いた穴

藤木正則氏との今年度の取り組みは、過去二年間の活動を振り返り、社会の中での学校の存在を客観的に捉え直すことから始まる。

幸運にも私たちは、アーティスト・イン・スクールの可能性を探るために台湾へ訪問するチャンスに恵まれ、その捉え直しの機会を得た。

それは偶然ではなく、本来この藻岩小学校での活動が始まるきっかけが、藤木氏が3年前に台湾に滞在したこと、そこでの経験が大きく起因しているのだ。藤木氏は、芸術文化はもとより、歴史教育について現地アーティスト・原住民と話し合う機会、その経験が日本の芸術文化や、特に教育の場の在り方について再考するきっかけとなり、小学校を舞台として活動を行う動機となったというのだ。

こうした話を聞かされていた私たちは、兼ねてから台湾に訪問し、台湾の社会に触れてみたいと考えていたのだ。

台湾では、3泊4日という実にタイトなスケジュールの中で、アーティスト・イン・レジデンス（アーティストが滞在、制作、発表などを支える仕組み）の施設や、台北市内で活動しているアーティストへの取材、そして小学校の見学と教職員の方々との対話を実現した。

私たちが訪問した新北市永和区永和国民小学は、いわゆるマンモス校で、たくさんの児童と教職員が在籍していた。そして、そこには日本の教育現場との様々な違いが存在した。

大きな違いとしては、ひとつのクラスに授業専門の教師と、生活面のケアをする教師が存在し、それぞれの役割に専念していること。それは、日本よりも管理面、寛容面における振り幅が大きいと感じ、すべてを肯定的に捉えることも難しいが、何より教職員の方々が皆生き生きと誇りを持って仕事をしているのが印象的だった。

そしてもう一つ大きな違いを感じたのは、社会科の授業だった。授業や教科書を拝見すると台湾の近現代の歴史教育にとっても厚みがあり、自分たちの国の成り立ち、日本との関係についてしっかりと学んでいた。このことは、台湾のアーティストの活動や行動に多く見受けられる個の主張や自治意識に大きく影響していると認識した。

この他にも幾つかの相違点を見出し、大いなる刺激を受けて帰国の途についた。

帰国後、何度か藻岩小学校を訪れ、台湾での体験を含め、私たちの活動について何人かの教職員の方々と共有した。その対話は、日本の学校における制度の問題や個の主体性、自発性について語り合う機会を持つに至った。

そして、藤木氏は、三年間に及ぶ藻岩小学校でのアーティスト・イン・スクールの中で芽生えた教育現場への問いの象徴として、小さな穴の開いたドア（ドアスコップを取り付けられている）を設置した。

藤木氏曰くそれは「節穴」だという。

ネガティブな意味で捉えられる「節穴」という言葉をあえて用いてその穴は数日間学校に設置された。

アーティスト・イン・スクールは、学校に「風穴」をあける取り組みだと言われることがある。それはポジティブな意味で使われるのだが、なぜ学校に風穴が開くのか、開ける必要があるのか、そもそも風穴が開くとはどういう意味を持つのか、未だ模索中である。今のところ藻岩小学校に大きな風穴が開いたという実感は持てない。

今期待することは、藤木氏が設置した「節穴」が、学校（あるいは教室）という内の世界と社会という外の世界を意識する装置として、学校が様々な個のあり方を許容する象徴としてそれぞれの印象に刻まれることだ。そうした個々の捉え方が、もしかしたらアーティスト・イン・スクールがもたらす「風穴」ということになるのかもしれない。



節穴か、風穴か ―― 三年目の藻岩小に空けて塞がれた穴

2017年の3月終業式前の数日間、ある学年のある教室のドアに穴を空け、そこにドアスコープを取り付けた。一つは廊下から教室に向けて、もう一つは教室から廊下に向けてだ。いった何人の子ども達がそこから覗いただろう。そしていったい何人の先生が覗いてみただろう。そして、いったい何人がそこに目を当て未来や過去を頭に浮かべながら、自分の姿を重ね合わせただろう。年齢を重ねて、また学校へ行くことは昔を懐かしむことだけではない。反省とは言わないが当時気づかなかった事柄を省みることで未来に悔いを残さないことではないだろうか。この節穴は誰もが通過してきた義務教育を再度振り返った上で、今の教育や社会の歪みをどう見るかという、ある意味シンボリックな行為である。目に映るこの教室や廊下の壁の光景をいつものありふれたもの、懐かしいものと捉えるならばそれは物事の意味を見抜けないという意味においても節穴であるかもしれない。見るという事は、当たり前であるが現前の物理的光の現象だけを意味していない。歴史を踏まえた社会動向や過去の反省や未来への不安や希望も含めて思考を伴って個人が風景として立ち上げる行為を「見る」という。

藻岩小の1年目は学校というある意味閉ざされた洗脳指導空間を這いずり回った。2年目はそんな学校の中にあっても、いくばくかの教員は子どもの教育指導だけでなく、自らの現状批判と子ども達が抱く教師批判や教育批判をも受け止めつつ子どもの成長を受容しているとの希望を抱いて彼らの日常的な視点を知りたいと思った。そしてそれは一人の教師として学校をどのように捉えているのか、写真による「学校の風景」という「問答」を投げかける試みとして実現された。(勿論というか、敢えてというか、このような説明を教職員にした訳ではないが)3年目、僕たちはある意味少しでも見聞を広げようと海外に出かけ、僕個人としては他校でのアーティスト・イン・スクールにもお邪魔してみた。それは、教育環境の改善といった小手先だけの解決ではなく、本当に小さくても良いから風穴を空ける意志や勇気は見つけれなかったからだ。しかし、それを教育現場に関わる人たちに望むのは現状ではまだまだ遠い願いだと悟らされもした。

僕は、この事業における希望は余白や隙間をつなげていき、実はそこから風穴を空ける事ではないかと考えるところがある。なかなか国の思惑とそれに追随してしまう学校教育の壁は厚い。でも藻岩小では数日の間ではあったが、教員の勇気ある決断と事業主体のAISプランニングの努力によって小さな穴は空けられた。その穴は僅かな痕跡を残して今はもうすでに塞がれてしまっているにしても、である。

藤木 正則

おとどけアート&関連事業実績

札幌市(37)

- 2006年10月2日(月)～10月6日(金)・14日(土)
 - 『scherzo school～めあての魅力～』
 - 札幌市立清田小学校 × 加賀城 匡貞 (ステージパフォーマー)
- 2007年1月22日(月)～2月2日(金)
 - 『ゆきのくにのしるがね城』
 - 札幌市立山の手南小学校 × 野上 裕之(彫刻家)
- 2007年2月5日(月)～2月16日(金)
 - 『有明という土地の引力、人は旅を経てここに辿りつく。』
 - 札幌市立有明小学校 × 石川 直樹(写真家)
- 2007年11月26日(月)～12月7日(金)
 - 『原始人になって洞窟をつくらう!』
 - 札幌市立新築東小学校 × 宝音&図布(版画家)
- 2008年2月4日(月)～2月15日(金)
 - 『抱腹☆絶頂 うゝおるけーのFUJISAN』
 - 札幌市立新光小学校 × 河田 雅文(美術家)
- 2008年11月10日(月)～21日(金)
 - 『ゴ×7=35(ごしちさんじゅうご)』
 - 札幌市立太平小学校 × 高橋 喜代史(現代美術家)
- 2009年1月26日(月)～2月6日(金)
 - 『白い迷宮』
 - 札幌市立幌西小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2009年11月4日(水)～11月13日(金)
 - 『ゆめのとんでんみなみ村』
 - 札幌市立屯田南小学校 × 今村 育子(現代美術家)
- 2010年2月8日(月)～2月24日(水)
 - 『サマーコレクションin冬』
 - 札幌市立北小学校 × 東方悠平(現代美術家)
- 2010年10月12日(火)～12月3日(金)
 - 『たんぼぼタワー』
 - 札幌市立清田小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2010年11月8日(月)～11月19日(金)
 - 『火星世界旅行』
 - 札幌市立福住小学校 × 斉藤 幹男(映像作家)
- 2011年1月19日(月)～2月4日(金)
 - 『みんな星だ! ☆ご近所の宇宙』
 - 札幌市立常盤小学校 × 富士 翔太郎(画家)
- 2011年2月7日(月)～2月19日(土)
 - 『ゆきだるまとチョコレート』
 - 札幌市立旭小学校 × 片岡 翔(映画監督)
- 2011年9月26日(月)～10月15日(金)
 - 『秋のひみつ基地』
 - 札幌市立稲穂小学校 × 小助川 裕康(美術家・庭師)
- 2011年11月28日(月)～12月16日(金)
 - 『摩訶不思議プロジェクト』
 - 札幌市立あいの里西小学校 × 富田 哲司(現代美術家)
- 2012年1月17日(火)～2月3日(金)
 - 『マルダ宮でまるだき湯』
 - 札幌市立みどり小学校 × 山本 耕一郎(現代美術家)
- 2012年8月20日(月)～9月6日(木)
 - 『石山東ショーリンピック』
 - 札幌市立石山東小学校 × トムス・オルタナティブ(現代美術家)
- 2012年10月1日(月)～10月13日(土)
 - 『Tommyの字遊探険』
 - 札幌市立富丘小学校 × 本田 蒼風(アート書家)
- 2013年2月1日(金)～2月15日(金)
 - 『スノーガーデンショーinもみじの森』
 - 札幌市立もみじの森小学校 × 小川 智彦(ランドスケープアーティスト)
- 2013年8月20日(火)～10月4日(木)
 - 『歌と記憶のファクトリー』
 - 札幌市立資生館小学校 × アサダワタル(日常編集家)
- 2013年9月1日(日)～12月24日(火)
 - 『切り絵の森～モミジ祭～』
 - 札幌市立北陽小学校 × 佐藤 隆之(芸術家)
- 2013年10月1日(火)～10月12日(土)
 - 『「ミ」里塚小学校』
 - 札幌市立三里塚小学校 × 加賀城 匡貞(ステージパフォーマー)
- 2014年2月10日(月)～2月21日(金)
 - 『来光楽園-ライライパラダイス-』
 - 札幌市立北陽小学校 × 風間 天心(芸術家/僧侶)
- 2014年8月20日(水)～12月6日(土)
 - 『北陽ミ術館』
 - 札幌市立北陽小学校 × 加賀城 匡貞(ステージパフォーマー)
- 2014年9月16日(火)～9月26日(金)
 - 『50のいたずら』
 - 札幌市立元町小学校 × ダムダンライ(芸術家)
- 2014年11月4日(火)～11月15日(土)
 - 『アーティスト・イン・スクール・モイワ』
 - 札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報)
- 2015年2月9日(月)～2月20日(金)
 - 『風景の裂け目』
 - 札幌市立山鼻小学校 × 持田 敦子(芸術家)
- 2015年9月1日～11日、2016年2月23日～26日
 - 『ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド』
 - 札幌市立豊東小学校 × 永田 壮一郎(音楽家)
- 2015年11月2日(月)～2016年2月18日(木)
 - 『機械と植物の間の生き物』
 - 札幌市立栄東小学校 × 小町谷 圭(メディアアーティスト)
- 2016年1月19日(日)～2月13日(土)
 - 『ここは札幌ではない』
 - 札幌市立平岸高台小学校 × 黒田 大祐(美術家)
- 2015年6月18日(木)～12月24日(木)
 - 『halle studio in 北陽』
 - 札幌市立北陽小学校 × halle(アーティストグループ)
- 2015年10月21日(水)～2016年2月26日(金)
 - 『学校の風景』プロジェクト
 - 札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報)
- 2016年10月3日～10月22日(土)
 - 『5感を使ったアートワーク』
 - 札幌市立涌川小学校 × 山崎 阿弥(声のアーティスト)
- 2016年12月6日(火)～12月16日(金)
 - 『とくいの銀行西岡小学校支店』
 - 札幌市立西岡小学校 × 深澤 孝史(美術家)
- 2017年1月23日(月)～2月17日(金)
 - 『なえぼのむかしをさいげんしてみる』
 - 札幌市立苗穂小学校 × 進藤 冬華(美術家)
- 2016年11月22日(月)～12月2日(金)
 - 『大きな子術』
 - 札幌市立月寒東小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2016年4月27日(水)～2017年3月24日(金)
 - 『アーティスト・イン・スクール・モイワ』
 - 札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報)

帯広市(4)

- 2005年1月24日(月)～2月4日(金)
 - 『小菅スケートスクール』
 - 帯広市立大正小学校 × KOSUGE 1-16(美術家)
- 2006年2月6日(月)～2月10日(金)
 - 『はなその劇場』
 - 帯広市立花園小学校 × 杉浦 圭太(俳優)
- 2006年2月18日(土)
 - 『歌つくる会』
 - 帯広市立大正小学校 × クニ 河内(音楽家/作曲家) & 野田 美佳(音楽家/打楽器奏者)
- 2007年9月18日(火)～9月28日(金)
 - 『自分のコマージュを作るう!』
 - 帯広市立広陽小学校 × anti-cool(パフォーマー)

羽幌町(1)

- 2009年6月30日(火)～7月1日(水)
 - 『天売写真館を作るう!』
 - 羽幌町立天売小・中学校 × 石川 直樹(写真家)

美瑛市(1)

- 2012年8月16日(木)～17日(金)
 - 12月1日(土)～2日(日)
 - 『はじめての写真展』
 - アルテピアッツァ美瑛 × 石川 直樹(写真家)

岩見沢市(1)

- 2012年10月13日(土)～14日(日)
 - 『顔出しパネルを作るう!』
 - 岩見沢駅駅内 × 長谷川 仁(美術家)

二セコ町(1)

- 2006年1月22日(月)～2月2日(金)
 - 『ドーム/DOME - みんなでドーム』
 - 二セコ町立二セコ小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)

豊浦町(1)

- 2006年11月7日(火)～11月17日(金)・20日(月)
 - 『そらぎん船が行く - そらぎんしゅぶ』
 - 豊浦町立大岸小学校&鉱山分校
 - 磯崎 道佳(彫刻家)

松前町(1)

- 2010年9月27日(月)～28日(火)
 - 『松前写真館を作るう!』
 - 松前町立松城小学校 × 石川 直樹(写真家)

虻田郡(1)

- 2012年1月12日(木)～13日(金)
 - 『雪の羊蹄山と住んでいる生き物を作るう!』
 - 虻田郡真狩村小 × 長谷川 仁(美術家)

士幌町(6)

- 2006年12月4日(月)～12月15日(金)
 - 『物語から仮面を作るう!』
 - 士幌町立北中音更小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2007年8月27日(月)～9月7日(金)
 - 『ヒーローVSゴモゴモ怪獣』
 - 士幌町立佐倉小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2007年10月1日(月)～10月12日(金)
 - 『たたく=命(人+十叩)』
 - 士幌町立北中音更小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)

- 2008年7月23日(水)～8月1日(金)
 - 『むごころのさくら』
 - 士幌町立佐倉小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)
- 2008年10月6日(月)～10月17日(金)
 - 『はつがツンス』
 - 士幌町立北中音更小学校 × 平原 慎太郎(ダンサー)
- 2009年8月24日(月)～9月11日(金)
 - 『タータ星からの転校生』
 - 士幌町立北中音更小学校 × タノタイガ(現代美術家)

大空町(1)

- 2013年11月21日(木)～22日(金)
 - 『最初で最後の写真展』
 - 大空町立豊住小学校 × 石川 直樹(写真家)

斜里町(1)

- 2014年7月14日(月)～15日(火)
 - 『最初で最後の写真展』
 - 斜里町立朱円小学校 × 石川 直樹(写真家)

中標津町(1)

- 2014年8月8日(金)～16日(土)
 - 『西竹ミラクルメリーゴーランド』
 - 斜里町立西竹小学校 × 長谷川 仁(美術家)

音更町(2)

- 2005年8月22日(土)～8月26日(月)
 - 『音更未来研究所』
 - 音更町立音更小学校 × ゴウヤスノリ(ワークショッププランナー) & 松本 力(映像アニメーションアーティスト)
- 2008年9月1日(月)～12日(金)
 - 『非日常のあたりまえ』
 - 音更町立東士狩小学校 × wah(参加型表現活動集団)

浦幌町(2)

- 2009年10月26日(月)～11月6日(金)
 - 『オペラ 浦幌の大きな海の葉? 山の葉?』
 - 浦幌町立厚内小学校 × 開発 好明(現代美術家)
- 2011年9月20日(火)21日(水)、11月23日(水)～25日(金)
 - 『鮭の一生ドキュメント』
 - 浦幌町立厚内小学校 × 石川 直樹(写真家)

幕別町(1)

- 2007年2月20日(火)～3月2日(金)
 - 『祭太郎が祭をつくる!?!』
 - 幕別町立遠別小学校 × 祭太郎(パフォーマー)

主催及び関係事業一覧

- 十勝アーティスト・イン・スクール事業
- おとどけアート事業
- (財)北海道文化財団“文化の宅配便”事業
- トヨタ・子どもとアーティストの出会い事業
- 札幌アーティスト・イン・スクール事業
- (財)北海道文化財団“アート体感教室”事業



おとどけアート実行委員会について

2008年設立。会員数21名。美術教育や社会教育の研究者(北海道大学など)や、市内小学校教職員、文化団体職員、アーティスト、学生などの市民で構成。おとどけアートの活動を通じて子ども達が豊かな感性と多様性を学び、地域の人々とのつながりを活性化、促進することを目指す。

おとどけアート事務局について

おとどけアート事業の事務局として活動のコーディネートを担う一般社団法人AISプランニングは、学校、文化施設、商店街、公園など生活に身近な場所に注目し、アートを媒介として、人々の新たな関係性が構築されていくきっかけを生み出す取り組みを展開しています。アーティスト・イン・スクール事業の運営をはじめ、公共施設の管理運営なども行っている団体です。

活動スタッフ随時募集中!

おとどけアートをもっと知りたい、活動に関わりたいという学生や一般の方々を対象に活動スタッフの募集を行っています。事前準備や打合せから関わりたい方から、小学校での活動に参加したい方まで、幅広く募集をしています。実際の活動だけでなく、おとどけアートに関する説明なども行っております。一緒に活動を盛り上げたい、興味・関心がある方はぜひご連絡ください。

札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2016

主催:おとどけアート実行委員会

共催:sapporo2 project

助成:地域づくり総合交付金(北海道)

公益財団法人 アサヒグループ芸術文化財団

支援:札幌市

特別協賛:アサヒビール株式会社

コーディネート:一般社団法人AISプランニング

後援:札幌市教育委員会

協力:札幌市立鴻城小学校

札幌市立月寒東小学校

札幌市立西岡小学校

札幌市立苗穂小学校

札幌市立藻岩小学校

※ この企画はAAF2016に参加しています



札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2016記録集

発行:おとどけアート実行委員会

寄稿:深澤孝史、藤木正則、池田悦子

協力:札幌市立鴻城小学校

札幌市立月寒東小学校

札幌市立西岡小学校

札幌市立苗穂小学校

札幌市立藻岩小学校

企画・制作・編集:一般社団法人AISプランニング

※ 本事業は「第三次札幌市新まちづくり計画」の一環として企画・実施されております

やどどげアート

お問い合わせ

おとどけアート実行委員会 事務局 アイス 一般社団法人AISプランニング
〒064-0811北海道札幌市中央区南11条西7丁目3-18
TEL:011-596-6726 FAX:011-596-6727 E-mail:info@ais-p.jp HP:http://ais-p.jp/
事務局担当: 小林 亮太郎 電話: 070-5288-5367 mail: ryotaro@ais-p.jp

過去の活動はブログからご覧いただけます。
inschool.exblog.jp/ 又は「おとどけアート」で検索!